

平成30年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (1月31日実施)	総合評価(3月14日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程学習指導 ・自信を持って社会参加し、自立に対する意欲をもって臨む生徒を育成する教育課程を検討し、再構築する。	①「わかる・もっとやってみたい授業」「学びあえる授業」を積み上げる。 ②「授業研究・支援会議」のシステム化を進め、チームによる授業改善を図る。	①実態把握を活かした指導計画の作成および学習内容の設定を行い、授業実践する。授業後の学習評価を次の授業に反映させる。 ②「授業研究・支援会議」で得た改善アイデア等を共有化する。	①実態把握と学習評価を反映させた授業を実践し、生徒が主体的に授業に参加できたか。 ②「授業研究・支援会議」のシステムを共有化し、チームによる授業改善ができたか。	①授業で「選択する、協力する」などの場面を取り入れたことにより、生徒が主体的に参加できるようになった。教科会では教科ごとに3年間の学習内容を検討した。 ②支援会議を通し、有意義な改善アイデアを共有できた。授業評価や改善アイデアを次の授業に活かす流れができた。	①各教科会での情報共有を生徒の課題に応じた良い指導につながる。学習内容は、3学年全体の実態を見通したすり合わせが必要である。 ②改善アイデアを共有するため、ミニ研修会での紹介、支援会議でのプレインストームングなどの手立てを講じる。	考えさせて進める授業の推進、よりよい指導例の報告、有意義な改善アイデアの実現、システムの明確化を望む。 【アンケート】保護者 83.5% 生徒 73.7% (とてもよい、だいたいよい、合計)	①生徒の実態を踏まえた年間指導計画や指導案の作成は進んだ。系統立てた3年間の学習内容の検討授業改善にも取り組む必要がある。 ②授業評価を次に活かす授業改善の取組が進んだ。取組の実践状況を周知し、チームによる授業改善にもつなげていく。	①主体的に参加できるかなど教科会での授業研究をとおし系統立てた3年間の教科指導内容について新学習指導要領を踏まえて作成する。 ②授業の資料や写真の掲示、サーバーやポータルで見出しにキーワードを用いて紹介するなど、改善アイデアを活用しやすくする。
2	生徒指導・支援 ・生きる力の基盤となるものを育む授業に活かせるアセスメントを検証し、指導に反映させる。 ・社会生活に必要な、他者との協調・思いやり、規範・モラルの意識を育む指導を充実させる。	①生徒の実態や課題の捉え方として共通認識できるツールを作り、3年間を見通した取組として、実用化につなげる。 ②すべての教育活動において人権保護の意識を高め、全職員でいじめ防止に取り組む。コミュニケーション授業等においてSSEに積極的に取り組み、指導や支援を実践する。	①入学後から1学期間で行う各アセスメントについて、試行を通し、項目・内容を整理する。各アセスメントについて試行を通して、評価表の形式を検討する。 ②専門職との協働のもと、授業案を立てる。 ③教育相談や聞き取り、いじめ防止アンケートなどを行い、指導に反映させる。携帯電話教室・サイバー犯罪教室(事前事後学習を含む)などを活用して、日々の指導につなげる。	①生徒の実態や課題を捉える項目・内容を整理した評価表を、試行を通して作成できたか。 ②教育相談や聞き取り、いじめ防止アンケートなどで生徒の状況をつかむことができ、適切に指導に反映できたか。専門職と協働し、SSEを活かし実態に合った授業・支援ができたか。学習を通じて、自分を守り相手を傷つけないポイントについての理解が深まったか。	①6種類のシートを作成し、1年生にアセスメントを実施した結果、生徒理解に役立ち、「なりたい自分」の聞き取りなどの結果を個別指導計画作成に活用できた。次年度へ引き継ぎ資料作成ができた。 ②教科会を活用し、授業担当者や専門職で協議し、他学年の授業の情報共有や意見交換を行い、指導に役立てることができた。教育相談やいじめ防止アンケートの聞き取り、SNS教室等を活用して、生徒の状況をつかみ、日々の指導に適切な反映できた。	①より生徒理解につながる内容や生徒自身が活用できる内容を精査していく必要がある。3年間のアセスメント計画表については周知が十分でなかった。 ②研修会等を充実させ、実践例の紹介等を通して職員の理解を深めていく。 SNS等を通じたトラブル防止の取組は、今後も授業で取上げる。人権保護の取組も、研修を計画実施する。	実態把握の反映は理にかなっている。SSEを駆使し、社会の中でやっていたことと悪いことを理解してもらおう取組に、さらに注力してもらいたい。 【アンケート】保護者 72.7% 生徒 69.2% (とてもよい、だいたいよい、合計)	①スポーツに関わるシートの使用により、生徒本人のモチベーションアップが見られた。今後、教員・生徒が共有でき、生徒が自己評価できるような内容も必要である。 ②コミュニケーションの授業で専門職と協働して授業実践と振り返りを行った。卒業後を見据えた取組の充実が必要である。いじめ防止への取組を行い、生徒からの相談に適切に対応した。人権意識の育成を継続していく。	①1年目の成果を活用し、次年度、積み重ねる。生徒の姿容に応じた、個別支援計画への反映、個に配慮した授業計画への活用の意識を浸透させていく。 ②教科会をさらに活用し、進路学習や職業の授業とも連動し、3年間を見通したSSEの取組を行っていく。アンケート結果を受け止め、いじめ防止に一層努める。学校の教育活動全体を通して、人権保護の意識を高める。
3	進路指導・支援 ・生徒が納得できる進路選択できるように、生徒の思い、状態像を反映した指導、支援を行う。	①キャリア教育の視点(「社会的自立」や「生活の充実」)に向けた確かな力を培う ②アフターフォロー業務全体の効率化を図るとともに、卒業生の実情に応じたアフターフォローを実施する。アフターフォローで見えてくる課題を整理し、校内で共有する。	①3年間を見通した進路学習の指導内容を、各年次の目的に応じて整理し、まとめる。またそれを学年・進路・UDで共有し、授業実践や進路行事の設定を行う。 ②H30年度のアフターフォロー計画を基本とし、ケースに応じて、早めに情報収集を行い対応する。(電話・巡回・各種会議)年2回(9月・3月)職員会議で全体にアフターフォローの結果を報告し、情報を共有する。	①3年間を見通した進路学習の指導内容を年次ごとに整理し、まとめることができたか。また、学年・進路・UDで共有し、実践することができたか。 ②アフターフォロー業務の効率化と、生徒の実情に応じたアフターフォローが実施できたか。アフターフォローで見えた課題を校内で共有し、在学中に必要な指導も含めて確認することができたか。	①職業の教科会で、3学年分の進路学習の内容と、アフターフォローで見えた進路学習で在学中に必要な進路学習の内容を合わせた「3年間の進路学習の内容」を一覧表にした。 ②実施計画に従い、1期生から3期生まで合計100件のアフターフォローを実施できた。ケースの状況に応じて進路先に訪問し迅速に対応した。見えてきた課題について整理し、全体に報告した。	①一覧表を周知して、職業の授業や他の教科の計画にも活かせるようにする。各学年の職業の取組を、系統立てた3年間の取組につなげる。 ②アフターフォローの状況や見えた課題をもとに、在校生の指導に活かしたいキャリア教育のポイントを会議等で報告するとともに、保護者にも通信等で広報していく。	挨拶と返事は社会参画の基本、より外に出る実体験や社会的自立の具体的なイメージを想定した進路学習をさせてほしい。定着支援は順調である。 【アンケート】保護者 58.5% 生徒 69.9% (とてもよい、だいたいよい、合計)	①3年間の進路学習の内容を一覧表にすることができた。それを共有して各教科で活用することは今後の課題となる。 ②アフターフォローを実施し、卒業生それぞれへの対応が迅速に行えた。在学中に必要なキャリア教育としての指導内容について、整理・報告できた。今後、保護者に対しても広報し、情報を提供する必要がある。	①3年間の進路学習の内容について、職業をはじめ各教科で組み込めるよう、教科会を活用して取り組む、社会的自立の具体的なイメージを想定した進路学習につなげる。 ②報告を通し、アフターフォローに係る連携体制を強め、定着を図る。卒業生が抱える課題を整理・分析し、在学生の指導に活かす。実績を広報していく。
4	地域等との協働 ・地域の特性を活かしたセンター的機能を検討し、インクルーシブ教育の推進に寄与する。	①高校への支援について、具体的に支援スタッフ間の情報共有を図り、支援方法を構築し実施する。高校との交流及び共同学習を推進することにより、地域資源を活用する授業をいっそう充実させる。 ②地域の人的資源を積極的に活用する。防災教育及び避難訓練等をより実践的に実施する。	①過去に巡回した高校にその後の様子をつかみ、必要に応じて巡回相談等を行う。近隣の高校の取組の様子をつかみ、新たなニーズを探る。 これまでの取組を参考に、共に活動できる学習場面を探りながら、計画実施に向けたやり取りをしていく。 ②外部講師としての地域資源の活用を積極的に推進できた。防災教育及び地域と共に避難訓練等を行うなど、より実践的に推進できた。	①高校への支援について、支援スタッフ間で情報共有を図り、働きかけを行うことができたか。共に活動できる場面を探り、地域資源を活用した授業に向けてやり取りができたか。 ②外部講師としての地域資源の活用を積極的に推進できた。防災教育及び地域と共に避難訓練等を行うなど、より実践的に推進できたか。	①2校の高等学校に巡回相談、高校の支援スタッフと連携し、支援を行っている。近隣の高校1校と、パン販売を通じた交流を3回行った。生徒の自信獲得にもつながった。ハイスクール議会の高校生議員と本校の卓球部員が練習や試合とおして交流した。 ②外部講師の活用は授業や部活動で14回、臨場感のある活動を行えた。地域防災拠点運営委員の協力を得て、体育館での防災訓練を実施し、避難所生活のイメージを持つことができた。	①教育相談コーディネーター間の連携を充実させ、必要に応じてコーディネーターや進路担当、他の教員なども連携して関わる。 近隣の高校でのパン販売による交流の定着を図る。他の活動による交流の可能性も引き続き探っていく。 ②外部講師としての地域資源の活用を積極的に推進。地域と連携した防災訓練の定着を図る。作成した避難所初動マニュアルについて、より使いやすいうものに改善していく。	社会に開かれた学校としての取組の推進、高校支援では適切に二次支援先につなげる機能の遂行、インクルーシブ教育推進への寄与などを期待する。地域との連携は互いに命をつなぐこととなる。 【アンケート】保護者 51.6% 生徒 70.5% (とてもよい、だいたいよい、合計)	①近隣の高校で継続的に巡回相談を行った。他校でのニーズを探ることが必要である。作業班のパン販売による、近隣の高校との交流計画を進めた。活動の定着や拡大が課題である。 ②外部講師の活用により、各授業や部活動が活性化し、生徒の自発的な言動がみられるなど意欲向上につながった。地域と連携した訓練が必要である。地域防災拠点開設運営マニュアルを基盤に、県立学校における避難所対応マニュアルを作成した。	①近隣の高校に向け、機会を捉えてセンター的機能に関して情報提供や広報していく。インクルーシブ教育の意識をより高めて、パン販売による交流の定着と拡大を図る。他の活動における交流・共同学習の可能性を探り、実施に向け検討していく。 ②地域資源の活用を積極的に推進し、日ごろの指導にもその効果を反映させる。地域と連携した防災訓練の定着を図り、より相互理解と協働の意識を高めていく。
5	学校管理 学校運営 ・学校・教職員の特別支援教育の専門性をより向上させる。 ・事故を未然に防ぎ、学校への信頼を維持する。	①研究体制を整え、研究内容を充実させる。 ②グループ業務の適正化をさらに進めて、わかりやすいグループ・班運営を行う。	①「生徒の実態に合わせた学習グループ編成について」をテーマとし、実践研究を行なう。 ②見通しの持ちやすい業務分担表や年間計画を作成し、班別あるいは担当別の打合せを計画的に実施する。	①研究成果によって、より生徒の実態に合った学習グループが編成できたか。研究の成果によって、学年を超えた知見の共有ができたか。 ②業務引継ぎ資料を作成できたか。業務の振り返りを含めてスケジュールや内容など次年度担当者が引き継ぎやすい内容だったか。	学年の実態に応じ、生徒の実態に合わせた学習グループが編成できた。教科や内容、生徒の実態に合わせたグループ別学習について知見の共有ができた。 ②グループ内の係毎に業務引き継ぎ表を作成した。スケジュール表等を見直したことで、一部の業務では、グループ員が主体的に業務を遂行できるようになった。	①生徒の実態に合った学習グループにより、学習への取組状況は向上しつつある。来年度は学部全体で整理できることよい。 ②業務の振分けや業務への主体的な取組は進んではいないが、改善はさらに必要である。係の引き継ぎ票をよりわかりやすいものに修正する。	「学ぶ組織」として研究を盛り上げてほしい。コース制廃止後の苦心点から、課題の明確化をするとよい。 【アンケート】保護者 72.5% (とてもよい、だいたいよい、合計)	①各学年の学習グループ編成について実態を共有できた。早めに研究の進め方やまとめ方について全体で確認・周知しておく必要があった。 ②業務引継ぎ資料の作成が進み、業務内容分担やスケジュール表が整理されてきた。引き続き取り組む。事故防止を強化することが必要である。	①研究の方法や進め方について、計画の早期に担当者間で整理・確認をする。 ②各グループの業務内容や課題を明確にし、改善に努める。事故防止や安全管理の視点で公務を整理し、教員が主体的に実践できる手立てを用い、課題に取り組む。